



モンゴル滞在日記 VI

木之内せつ子

7月27日(金)

夕方、ファッションショーというのを見に出かけた。映像では見たことがあっても、生でみるのは初めてだ。ダミヤザの姉が、以前モデルをしていたとかで、伝があって今回見に行くことになった。その会場は、座席が150くらいあり、モデルたちが歩いてくるキャットウォークと、観客席との間が狭いので、間近で見られる。モンゴルの伝統的な民族衣装を、現代的にアレンジした衣装で、美男美女が次々と登場する。その合間に、馬頭琴、歌、アクロバット、仮面舞踏等、盛りだくさんで、観客を飽きさせない。ツアーコースに入っているのか日本人団体客もいた。

7月28日(土)

ツォゴウやデルメヤトガは、東京や千葉の大学の留学生だが、ヘルレンは大阪の大学の留学生だ。関西の大学の留学生から、“大阪のお父さん”と呼ばれている酒瀬川実氏は、UB郊外にサマーハウスを持っている。ヘルレンから、一緒に彼のところに行かないかと誘われた。酒瀬川夫妻は、夏の間だけの2・3ヶ月をそこで生活しているが、それ以外は関西で暮らす。彼らが日本に帰っている間は、関西で世話になった留学生たちがサマーハウスをまもる。

昼ごろ何うと言ってあったが、結局出かけるのが昼過ぎになってしまった。大人はヘルレン、デルメ、M、私の4人、子どもはデルメの甥のバイヤルカ(3歳)とサイハナの娘のサランゴ(5歳)のふたり、全部で6人だ。6人でも全員が集合するとすると、予定通りにはならないのがモンゴルだ。

ヘルレンの車で2時過ぎにサマーハウスに到着。すでに何人かの若者(全員関西の大学へ留学していたときに、“大阪のお父さん”に世話になった)が来ていて準備をしていた。

男性は庭で火おこしやテーブル・椅子のセッティング、女性は家の中で酒瀬川夫人を手伝って料理。日本から持ってきたコシヒカリを炊いて、手巻き寿司。Mは台所の手伝いに入ったが、デルメと私は、外でホルホグ(行宮焼)の野菜切りを手伝った。バイヤルカとサランゴは、先に来ていた子どもたち3・4人の中に入って遊び始めた。

酒瀬川氏は、グラス片手に外の椅子にゆったりと座

り、動きまわっている若者に時々声をかける。彼はもうかなり飲んでる。私たちがビールを飲みながらジャガイモの皮を剥く。ホルホグは、ホブドの河原で“親の会”の人たちが作っているのを見ていたので、だいたいの作り方はわかる。密閉鍋に肉、野菜、焼けた石と、次々入れていくのだが、酒瀬川氏はその途中で、ビールやアルヒ(!?)も入れる。1時間ほどでホルホグは出来上がった。台所からも料理が運ばれ宴会が始まった。歓談はもちろん日本語だ。子どもたちだけは、モンゴル語だが、彼らは初めて会ったのに、すぐに友だちになり、水遊びやボール遊びに興じている。

この家にはかき氷器までそろっていて、子どもも大人も喜んで食べた。ツァツァラガンジュースをかけると美味だ。ツァツァラガン(日本語では何というかわからない)という植物があるようで、そのジュースは赤くて甘酸っぱい。モンゴルのスーパーでは瓶詰で売っている。

突然大粒の雨が降りだした。その頃には料理もあらかた食べ終わっていたので、私たちは急いで飲み物だけを持って、屋内の屋根裏部屋に引き上げた。ここもかなり広くて20人くらいは余裕で入る。Mや私のグラスの中身は、すでにウーロン茶や麦茶になっているが、酒瀬川氏と若者たちは、まだビールや焼酎やアルヒを飲んでる。車で来ている人もいるだろうに、大丈夫なのか…。3・4台停まっていたはずだ。私は、運転手のヘルレンのグラスの中身が気になった。デルメは飲酒運転で捕まって、免停になったことがあるというから、モンゴルだって取締りはあるだろう。

7時を過ぎるころから、子連れはそろそろ帰り始めた。雨は止んでいた。私たちが7時半過ぎにお暇した。運転手のヘルレンは飲んではいるが外見は素面。検問に遇わないことを願う。途中で寝てしまったバイヤルカをデルメの姉の家に送り、検問にも遭わず無事帰宅。サランゴの母親のサイハナは、土曜日なのにまだ仕事なのか連絡がとれない。11時過ぎてやっと彼女が娘を迎えに来た。やれやれである。

7月30日(月)

午後になって、航空券を頼んであったダミから、明日の朝の便のチケットを予約したから、と連絡があった。

予定では明後日のはずだったのだが…。仕方がない。航空券の手配を自分でしないで、人任せにするとこんなこともあるのだろう。帰国準備開始。Mは延長ビザを取って、8月末まで滞在することになっている。

あわただしく荷物をまとめる。暗くならないうちに近くのスーパーに行った。モンゴル滞在中ずっと飲んでいたスティーツァイ(塩ミルクティー)のティーバッグとアルヒを1本買ってきてトランクに詰めた。

7月31日(火)

チンギスハン空港までヘルレンとMが送ってくれた。早朝なので車も疎らだ。スフバートル広場付近以外は、ほとんどノンストップ、つまり信号無視で30分足らずで空港到着。Eチケットもなかったが、パスポートのみでチェックインOK。定刻離陸。

ウランバートルから成田までの機内で、今回の4週間の旅を振り返る。

日本に何年か留学して帰国した若者たちと一緒に4週間過ごしてみて、それぞれみんな活躍しているのがよく分かった。でも私生活面での若者は、古い人間の私にはよく理解できないこともある。Mが言うには、デルメのガールフレンドは、毎夏モンゴルに行くたびに替わっている。デルメに直接訊いてみた。彼曰く、“彼女と付き合う際、相手の考え方や自分への思いは、からだの関係ができて初めてわかるものでしょう。”“あらあ〜!そうかしらあ〜!?”と私。

モンゴルの男女交際はおおらかでオープンだ。未婚のまま出産する例も少なくないそうだ。デルメの姉は未婚の母だし、留学生の中にはシングルマザーもいる。一昨日酒瀨川宅に一緒に行ったサランゴの母、サイハナもシングルマザーだ。こうした家族をみんなで支えあう雰囲気はいいなと思うのだが…。現にデルメは甥のバイヤルカを可愛がり、姉にも経済的援助をしている。

ホブドでのボランティア1日目の1番にとび込んできた、“粽巻き”(ぐるぐる巻き)の赤ちゃんにはビックリした。あの状態で1年間くらい育てるそうだ。ぐるぐる巻きは、寒さの厳しいモンゴルでは手足を出さない工夫であり、赤ちゃんの精神を安定させると言う専門家もいるとか…。モンゴルだけでなく南米でもそうするらしい。

1歳を過ぎてぐるぐる巻きをとってあげると、ハイハイやヨチヨチ歩きなしですぐに立って歩きだすとのことだが、本当だろうか。信じられない。5日間のボランティ

アで会った20数名のうち、上肢と下肢に問題がある子が何人かいた。私は専門家でないから、これはあくまでも推測にすぎないが、生後1年間ぐるぐる巻き状態で、手足を動かさないことと関係ないだろうか。

ホブドでのボランティアについては、思い残すことが多々ある。私たちはホブド県知事の紹介ということで、特別待遇を受けたが、はたしてそれに見合った“仕事”ができたのだろうか…? モンゴルの教育事情(特にハンディキャップのある子どもたちの)を事前にもっと調べておくべきだった。予備知識を全くもたずにホイホイ付いていってしまったのだから、納得できるボランティアができなかったのも当然のことだ。

今回は体力を使うよりも、相談やアドバイスということで、ことばでのコミュニケーションがほとんどだから、通訳者が必要不可欠だ。私たちはツォゴウだけが頼りだった。彼女がいなければ何もできなかった。ホブド大学には日本語学科があるという。夏休み中だから無理かもしれないが、そこの学生が少しでも力をかしてくれたら、ツォゴウの負担が多少は軽減され、私たちの“仕事”もより効率よくスムーズに進み、学生にとっても日本語実習ができる。これぞ一石三鳥というのは安易すぎるか…?

Mは、特定非営利活動法人“ニンジン”のメンバーだ。ニンジンとはモンゴル語で“人道的な”という意味。“モンゴルの障がい者との交流・支援の輪から広がった人間的な社会をめざす市民団体”とある。Mがこの10年ほど毎夏モンゴルに行くのは日本の酷暑から逃れるためだと思っていたが、ニンジンの活動で、車椅子や下肢装具をモンゴルに届けたり、現地の療育センターで交流したりもしていたのだ。だったらもっと情報をこちらにも流してくれればよかったのに…。あとの祭りか…。

午後2時、成田空港着。 (おわり)

→ → → → → → → → → → → → → → → →

【追記】

2月中旬、デルメとトガが来日した。モンゴル政府関係と日本の国交省の会議の通訳が主な仕事で、1週間ホテルに缶詰だったという。

先日、半年ぶりに新宿でふたりと再会した。彼らは3月上旬まで滞在していたが、Mのところにはほとんど泊まらず、日本国内を忙しくとびまわっていたようだし、彼らには1度だけしか会えなかった。私の昨年の旅が、不完全燃焼だったのなら、今年またモンゴルに来ればいいと、彼らは誘ってくれたが、おそらくもう無理だろう。